

1. 南山城の鎌倉時代の古瓦

1. はじめに

昭和58年度の当館の特別展示「山城の古瓦」を行うにあたり、今までにほとんど報告例のない笠置町笠置寺、和束町釈恩寺跡、加茂町岩船寺、随願寺跡、木津町鹿山寺跡、山城町光明山寺跡等の鎌倉時代の瓦の調査も行なった。

このうち、釈恩寺跡と随願寺跡の瓦は特に特徴があり、東大寺、醍醐栢杜遺跡、建仁寺、東福寺など、当時の代表的な遺跡の瓦と比較すると、当時の建築生産組織を考える上で重要であると考えられる。この2遺跡の瓦を中心に南山城の鎌倉時代の瓦を紹介し、若干の考えを述べてみたい。

2. 釈恩寺跡の瓦

釈恩寺跡は、相楽郡和束町原山小字福司に所在し、鷲峰山の南側の中腹の標高約260mの傾斜面にある。現在茶畑として開墾されているが、東西約50m、南北約20mのやや平坦になったところがあり周辺から多量の瓦が出土し、茶畑の周囲に積みあげられている。この寺についての記録はなく、地元で「シャクオンジ」と伝承されていたので、釈恩寺の字をあてたものである。ただ、この付近を「養成の芝」と通称し、『山城志』や『都名所図会』などの近世の地誌類には後醍醐天皇が元弘の乱の際笠置に向った時にここで休息したところと記されている。

ここで出土した瓦が、現在東和束小学校で保管されており、軒丸瓦7点、軒平瓦2点あった。^(注1)軒丸瓦はいずれも三巴文軒丸瓦(1.2)で、軒平瓦は2種類あり、A式(3『山城の古瓦』図録255以下図録と略す)は「小」字形の中心飾から2葉の蕨手が三転する均整唐草文で、蕨手が勾玉状になったものである。もう一種のB式(4 図録248)は「C」字形対向の中心飾から一葉の蕨手が六転する均整唐草文で、蕨手の先端が木の芽状に三叉になったものである。

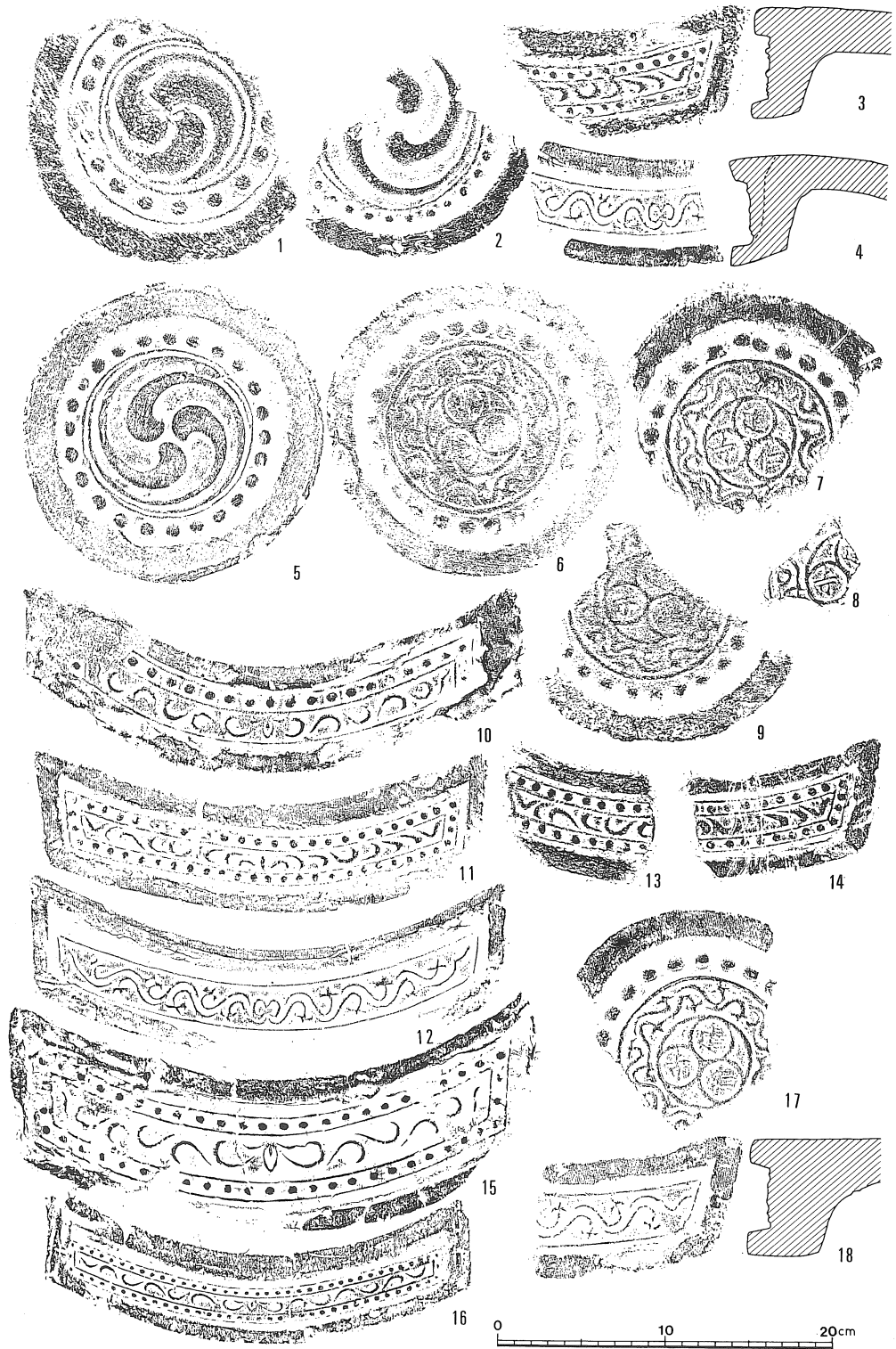
3. 随願寺跡の瓦

随願寺跡は、相楽郡加茂町東小字井手口他に所在する。観応元年(1350)の『浄瑠璃寺流記事』には、永承2年(1047)に建立された西小田原寺(浄瑠璃寺)に対して、長和2年(1013)に建立された東小田原寺のことが記されている。この東小田原寺が随願寺跡と伝えられているもので、当尾石仏群中で最古の紀年銘をもつ、弘長2年(1262)の藪ノ中地藏及び観音磨崖仏には「東小田原西谷浄土院」と刻まれている。^(注2)このことから、随願寺は、いくつかの谷に別れて子院をもつ大きい寺院であったことが知られる。『大乘院寺社雑事記』によれば、明応2年(1493)に「東小田原随願寺」と書かれ、本堂は二百年前に焼亡し、灌頂堂を本堂とし、三重塔、湯屋等が崩壊状態にあり、白山、春日の鎮守のあることが記されている。

現在では、鎮守であった白山、春日神社が残るのみで、この神社周辺の雑木林の中に古瓦片、礎石等が散布している。この寺跡から出土した瓦は、東小字下井手口の奥村慶一氏、同宗一氏が所蔵しておられ、慶一氏の先代が自宅横の畠の段が崩れた時に採集されたものと伝えられている。現存の瓦は軒丸瓦6点、軒平瓦3点などがある。軒丸瓦は2種類あり、A式(5)は三巴文で巴は尾を長く引き、周囲に大粒の珠文を密に配置する。B式(6, 7, 8, 9)は「建仁寺」銘軒丸瓦で、中央の銘の周囲に釈恩寺のB式軒平瓦と同様の先端が三叉の唐草文をめぐらし、さらにその周囲に大粒の珠文を密にめぐらしている。軒平瓦も二種類あり、A式は「東大寺」銘をもつもので、B式(10, 図録254)は下向きの蕾状の中心飾から一葉の蕨手が五転するもので、上と左右の外区にのみ珠文帯をめぐらす。蕨手は釈恩寺A式軒平瓦と同様に勾玉状のものになっている。

4. 釈恩寺と随願寺の瓦の系譜

それでは釈恩寺や随願寺出土瓦の同範、同文関係、文様系譜はどのようであったかをみていこう。巴文軒丸瓦は、特徴がつかみにくいため、主に唐



草文軒平瓦を中心にその展開を追求していくこととする。

釈恩寺軒平瓦A式の軒平瓦は、東大寺（図録250）醍醐栢杜遺跡（11，図録251）法金剛院（13，14，図録256，257）平安京六角堂で同範の可能性の強いものが出土しており、さらにこれと同一の意匠による同文の軒平瓦が大和の興福寺、安部寺、元興寺、豊浦寺、さらに河内の法性寺で出土している。^(注4) また釈恩寺軒平瓦B式は、醍醐栢杜遺跡（12，図録247）と同範で、東大寺（18，図録246）尊勝寺跡（図録249）、浄瑠璃寺で同文様のものが出土している。釈恩寺で出土するこの2種類の軒丸瓦が、醍醐栢杜遺跡の方形堂跡でも出土し、しかも方形堂跡ではこの2種類の瓦が軒平瓦のほとんどを占めていることは重要である。醍醐栢杜堂は、東大寺再建にあたって、大仏様という新しい建築様式をとり入れた重源が、建久6年（1195）までに建てたもので、しかも遺構の状況、出土した建築部材から大仏様建築であったことが確かめられている。^(注5)

随願寺軒丸瓦B式の「建仁寺」銘瓦は、建仁寺はもちろん、東大寺（17，図録258）、法勝寺跡で同範のものが出土している。随願寺軒平瓦Aの「東大寺」銘瓦は、東大寺はもちろん浄瑠璃寺、法勝寺で同文のものが出土している。また意匠は異なるが、伊賀新大仏寺^(注6)では「東大寺」銘の軒平瓦、法金剛院^(注7)で「建長3年東大寺三面僧坊」銘の軒丸瓦が出土している。随願寺軒平瓦Bは釈恩寺軒平瓦Aの意匠に似たところがあり、この瓦から案出されたものであろうと考えられる。この随願寺軒平瓦Bと最もよく似たものは、東福寺三門出土の瓦（15，図録252）で、東福寺瓦から下外区の珠文帯を除いたものが随願寺の軒平瓦Bとなる。この東福寺の軒平瓦は、「東福寺」銘軒丸瓦とセットになって、嘉禎2年（1236）に発願され、文永10年（1273）頃完成した三門の創建瓦として使用されたもので、やや小ぶりの軒平瓦（16，図録253）は三門にとりつく回廊に使用されたもので

^(注8)ある。この他にも、釈恩寺軒平瓦Bの意匠に似た軒平瓦も出土している。東福寺は東大寺の再建を援助した関白九条道家が東大、興福両寺の規模にならう寺の発願をして建立したもので、創建にあたっては東大寺大工物部為里と系譜のつながる物部為国がたざさわっている。現在の国宝東福寺三門は、室町再建のものであるが大仏様の建築であり^(注9)、創建三門は発掘調査の結果からもより純粋な大仏様建築であったことが想定されている。

建仁寺は、建仁2年（1202）に臨済宗の開祖栄西によって建立されたもので、この栄西は建永元年（1206）重源のあと東大寺大勧進となって東大寺の復興に努めた。栄西の建てた東大寺鐘楼は大仏様を主体とした建物である。^(注10) さらに栄西は承元2年（1208）の法勝寺八角九重塔の再建に東大寺大工桜島国宗と系譜のつながる桜島国重とともに加わり、建保元年（1213）に完成させている。

以上のような出土瓦と大仏様建築という新しい建築様式をとり入れ、それを普及した人との関係を図示したものが別図である。これらの関係から見ると、南山城の釈恩寺、随願寺など文献も残らず、当時の建物も残っていない寺の建物が瓦から見ると大仏様の強い影響のもとに建立されたことが想定される。このことは、大仏様の建築様式が^(注11)大和国内よりも山城国や瀬戸内方面に広がったことと関係があるものと考えられる。

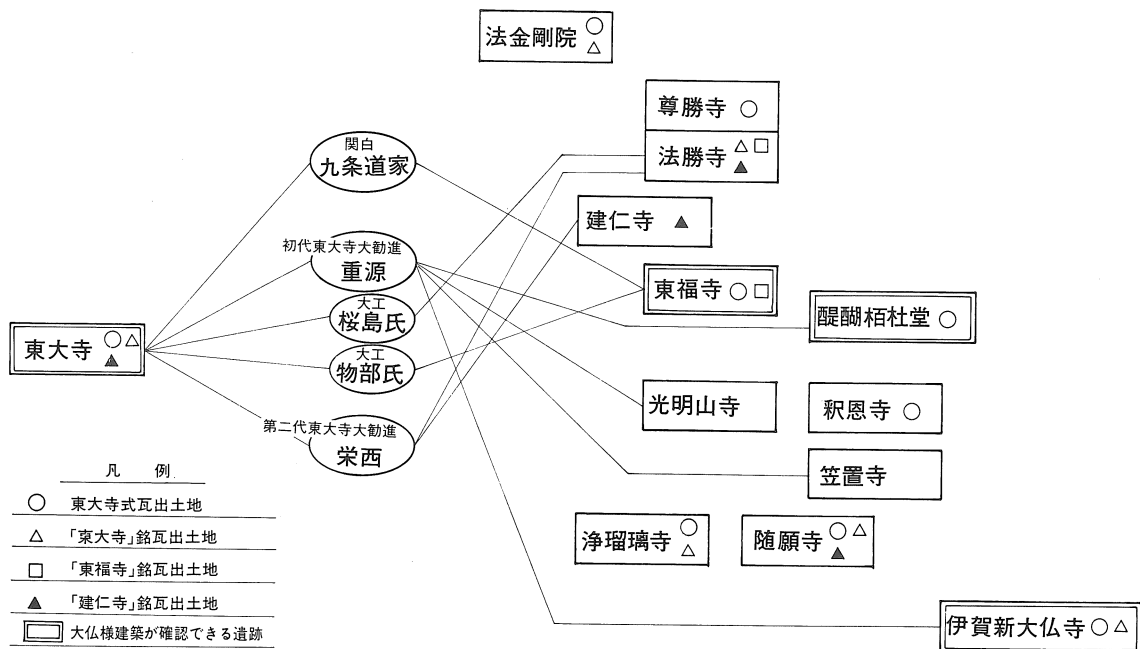
5. おわりに

寺名も定かでない釈恩寺跡と建立の経過のよくわからない随願寺跡の鎌倉時代の瓦が東大寺系の瓦でしかも、大仏様建築に伴うものであろうと想定した。

これに対して南山城には、『南無阿弥陀仏作善集』によって重源が造営にかかわったことが確かめられる寺がある。それは笠置寺般若台や光明山寺である。^(注12)ところが、この両遺跡出土の鎌倉時代の古瓦（図録261，264と267，269）は、いずれも東大寺系の瓦ではない。このことは同じ重源が造

釈恩寺・随願寺出土瓦と東大寺系瓦

1～4 釈恩寺，5～10 随願寺，11・12 醍醐栢杜遺跡，13・14 法金剛院，15・16 東福寺，17・18 東大寺



大仏様建築と瓦の関係図

営した醍醐栢杜堂とは大きく異なっている。これは笠置寺や光明山寺で現在までに採集されている鎌倉時代の瓦が重源の時代より新しいものであることによるのであろう。また笠置寺般若台では発掘調査の結果、ほとんど瓦が出土しておらず、瓦葺でなかったことにもよっている。さらに光明山寺の場合は、重源が関係したのは鉄湯釜であったため建物は建立しなかったことによっているのかもしれない。今後とも両遺跡の調査・検討を重ねていくとともに、さらに関連資料の調査を進めていきたい。

- (注1) 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』(1972)、同小学校には昭和44年当時には完形品の軒平瓦(図録248, 245の瓦)が所蔵されていたが今は所在不明である。そのため拓本、実測図は同校所蔵の断片と今回調査の採集品の断片を収載した。
- (注2) 川勝政太郎、佐々木利三『京都古銘聚記』(1941)
- (注3) 甲元真之、臈谷寿、松井忠春『平安京六角堂の発掘調査』(『平安京跡発掘調査報告』第2輯1977)
- (注4) 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」(奈

- 良国立文化財研究所学報第38冊, 1980)
- (注5) 杉山信三、岩城徹、梶川敏夫、清野紀子『栢杜遺跡調査概要』(1975)
- 杉山信三「重源の建築技法と栢杜遺跡」(『仏教芸術』105, 1976)
- 藤村泉「栢ノ森遺跡出土建築部材の調査」(『奈良国立文化財研究所年報』1975)
- (注6) 荒木伸介、田中淡、樋口徹『伊賀新大仏寺発掘調査報告書』(1970)
- (注7) 中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1970)
- (注8) 川嶋一雄他『国宝東福寺三門修理工事報告書』(1978)
- (注9) 仲村研「東福寺大工関係の新史料」(『史林』43-2, 1960)
- (注10) 太田博太郎「東福寺三門の建築について」(『建築史』4-1, 1942)
- (注11) 太田博太郎「東大寺の鐘楼について」(『建築史』2-6, 1941)
- (注12) 大河直躬『番匠』(1971)
- (注13) 笠置町教育委員会『笠置山般若台院六角堂跡発掘調査概報』(1981)
- (注14) 角田文衛「廢光明山寺の研究」(『考古学論叢』1, 1936)

(当館資料課長 高橋美久二)